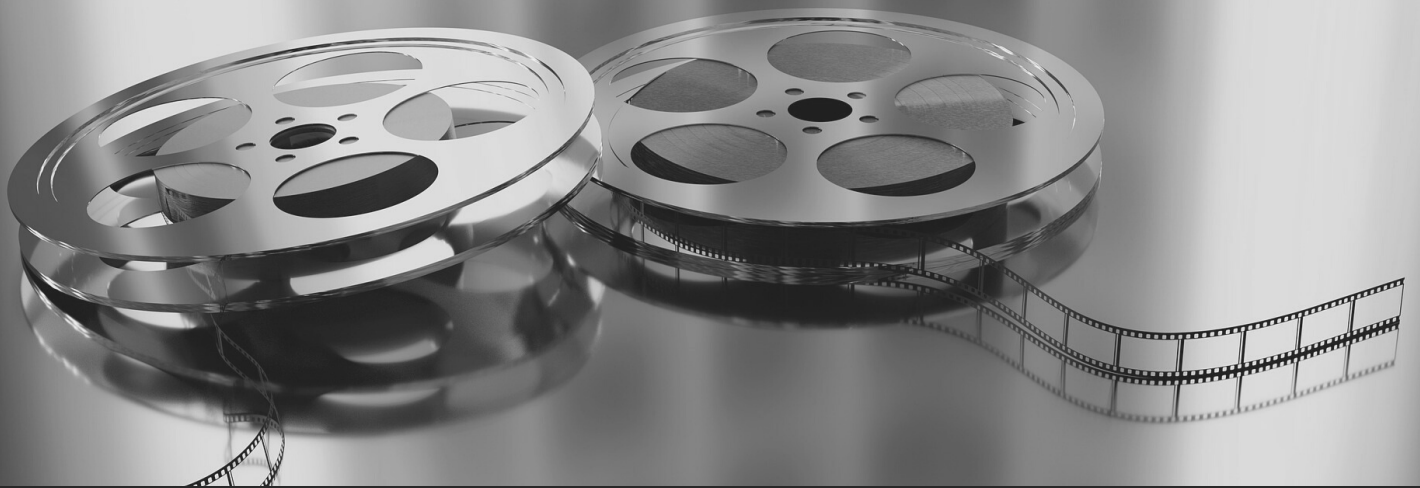


JAUW＜映画クラブ＞会報

シネマ通信

第2号（2021年11月30日）



Jeannette ジャネット Jeanne ジャンヌ

第2回鑑賞作品

聖女か？魔女か？

ジャンヌ ダルクを描く
2作品を同時公開！

監督、脚本：ブリュノ・デュモン

原作：シャルル・ペギー

キャスト：リーズ・ルブラ・プリュドム

（ジャンヌ・ダルクを演ずるのは、ロケ地で出会った全く演技経験のない少女。撮影当初、リーズはまだ8歳であった）

「ジャネット」

1425年、フランスとイングランドによる王位継承をめぐる百年戦争の真ただ中、ドンレミ村でジャネット（ジャンヌ・ダルクの幼名）は羊の世話をし暮らしていた。フランスの苦境に心を痛める少女を、修道女は優しく諭そうとするが、神の声を聴いたジャネットは、祖国を救う決意をする。

「ジャンヌ」

王の許しを得てフランス軍を率いるジャンヌ。目覚ましい活躍を遂げるが、その力に畏怖と疑心を抱く軍上層部が暗躍。ついにイングランド側に捕らわれたジャンヌを待っていたのは、教会による厳しく狡猾な異端審問であった・・・



About Them

フランスで最も有名な少女、ジャンヌ・ダルク。そのあまりに劇的な生涯が、クリエイターたちを掻き立てるのでしょう。映画界でも、ジョルジュ・メリエス、セシル・B・デビル、ヴィクター・フレミング、ロベルト・ロッセリーニ、リュック・ベソンなど、名だたる監督たちが、このテーマに挑んでいます。最も筆者の印象に残っているのは、バーグマンの美しいジャンヌと、ジョコビッチのがむしゃらなジャンヌ。二人の大スターは、使命感に駆られる村娘の高揚と、最後に訪れた休息の悲惨さを、それぞれの個性で見事に演じていました。しかし、今回のジャンヌは、実年齢がほぼ同じの無名の少女。誰もがその実在は疑わない、しかし、誰もその真実は知らないジャンヌ・ダルクの実像に、最も肉迫することができた作品といえるかもしれません。

監督は、現代フランス映画界で異彩を放つブリュノ・デュモン。「ジャンネット」では、ユニークな音楽と振り付けで、かつて類のないミュージカル世界を創出。「ジャンヌ」では、様式的な画面と白熱の議論で、観客を中世の異端審問に立ち合わせます。



第1回クラブデー

About Something

「MINAMATA-ミナマタ」を観ました。日本の公害病の原点ともいえる水俣を世界に知らしめた写真家、ユージン・スミスの実話にもとづく映画です。

第二次大戦中に負傷。写真家として世界に高く評価されながらも心身に深い傷を負い、自らを見失っていたユージン（ジョニー・デップ）は、後に妻となるアイリーンの懇請もあり来日。1971年から3年間水俣で暮らし、公害病の現実を数百枚もの写真に収めLIFE誌に送る。外者に対する村人たちの警戒感、チッソ側の妨害、数々の障碍を乗り越え、LIFEに掲載された写真は世界の人々を驚愕させ、抗議活動を強く後押しすることになる。この映画でもう一つ興味深かったのが、LIFEの編集長とユージンとの、歯に衣着せぬ応酬。当時すでに大赤字を抱えていたLIFEだが、編集長は躊躇しながらも重役たちを説き伏せ、ユージンの水俣取材を支援したのであった。

しかし、時代の局面で世界を動かしてきた誌も、ついに、2,000年には休刊を発表。若き日の私に"世界"を見せてくれたLIFEの実質的終焉を知ったときの、あの喪失感、今でも忘れられません。LIFE、別冊太陽、銀花、などのアート系雑誌、新聞の宅配、街の本屋さん、そして映画館。消えてほしくない"文化"は、どうしたら守れるのでしょうか？